

6－5					
主 題	園芸活動を通した個別ケアへの取り組み				
副 題	認知症高齢者の興味・関心を引き出すアセスメントの実践				
キーワード 1	園芸活動	キーワード 2	認知症ケア	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名	社福)一誠会	事業所名	グループホーム初音の杜
発表者(職種)	梶麻里(介護課長)		
共同研究(実践)者	グエン ティ テム(介護職員)		

電 話	042-691-8289	FAX	042-692-1772
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成 23 年 4 月開設の認知症対応型共同生活介護(グループホーム、定員 18 名)である。生活歴を大切にしたい個別ケアを実践するとともに、ISO9001 品質マネジメントシステムを活用し、サービス品質の向上に取り組んでいる。また、東京都初・全国 5 例目の社会福祉連携推進法人の本部法人として、地域や他法人との連携を推進している。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

T さん(女性、97 歳、要介護 4)は、平成 29 年にアルツハイマー型認知症と診断され、令和 4 年 9 月に当施設へ入居された。日頃から大きな声で話されることや怒りっぽい言動がみられ、職員とのコミュニケーションにも難しさがあり、ご本人の生活歴や趣味、興味・関心を把握できず、個別性のあるケアにつなげることが課題となっていた。

一方、洗濯物畳みや食器洗いなど役割のある活動には協力的であったものの、レクリエーションでは笑顔や表情の変化が乏しく、塗り絵を勧めても「大嫌い」と拒否されるなど、自ら興味を示す活動を見つけることが困難であった。そこで、ご本人が安心して主体的に参加できる活動を通して興味・関心や強みを把握し、個別ケアにつなげる支援方法を検討する必要があると考え、本実践に取り組んだ。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

園芸活動を継続的に実施することで、以下を仮説とした。

- ① 園芸活動を通して五感を刺激し、安心感と生活への意欲向上につなげる。
- ② 植物の成長や収穫という達成体験を通して、興味・関心や主体性を引き出す。
- ③ 職員や他利用者と園芸活動を行い、自発的な会話や笑顔を引き出す。
- ④ 園芸活動を継続することで、不穏な言動を軽減し心理的安定につなげる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

本研究では、屋外での活動に抵抗なく参加される様子がみられたことから、自然や季節を感じながら役割や達成感を得られる活動として園芸活動を取り入れた。植物の成長を職員とともに見守り、育てる過程を共有することで、ご利用者の興味・関心を引き出し、笑顔やコミュニケーション、主体性の向上につながると考え実践した。具体的な取り組みは以下のとおりである。

- ① ご利用者と一緒に、ミニトマトや胡瓜、隠元、茄子、じゃが芋、大根など、季節の野菜を栽培した。

- ② 苗植えから水やり、生育観察、収穫までを継続し、自然や季節を感じられる機会を設けた。
- ③ 野菜の色・香り・感触などを一緒に確認し、植物の成長や収穫を五感で感じられるよう支援した。
- ④ 収穫した野菜と一緒に味わい、その喜びを職員や他利用者と共有することで、自発的な発言や交流を促した。
- ⑤ 活動期間中は、笑顔や表情、自発的な発言、職員・他利用者とのコミュニケーション、活動への参加状況などを継続的に観察・記録し、その変化を評価した。

《4. 取り組みの結果》

活動開始当初は、職員からの声掛けに応じて参加されることが多く、自ら発言される場面や表情の変化は限られていた。しかし、園芸活動を継続する中で、野菜の成長に興味を示されるようになり、「赤くなったね」「大きくなったね」「いっぱいできてる」「美味しそう」など、野菜の様子について自ら発言される場面がみられた。収穫時には「ちゃんとトマト味するよ」と笑顔で話され、他利用者へ「食べてみて、ちゃんとトマト味ですよ」と勧める姿や、収穫した野菜を職員へ手渡し「美味しい味噌汁を作ってね」と話される様子がみられた。

また、「今度も連れて行ってね」と次回の活動を楽しみにされる発言も聞かれ、園芸活動への関心や参加意欲がうかがえた。さらに、活動中には職員や他利用者へ野菜の成長や収穫について自ら話しかける場面がみられ、収穫した野菜を手に笑顔で記念撮影をされるなど、職員や他利用者との関わりが広がっている様子が観察された。

《5. 考察、まとめ》

園芸活動は、植物の成長を継続的に見守り、収穫という達成体験を得られる活動であることから、認知症高齢者の興味や役割意識を引き出しやすい特徴があると考えられた。本実践では、活動を継続することで、ご利用者から野菜の成長や収穫に関する自発的な発言がみられ、職員や他利用者との関わりも生まれた。また、活動を通してご本人の興味や関心を把握することができ、研究開始時の課題であった「興味・関心が把握できない」「笑顔やコミュニケーションが乏しい」という課題の改善につながり、個別性のあるケアへ展開するための手掛かりを得ることができた。

本実践は一事例であり、数値的評価には限界があるものの、継続的な観察を通じて園芸活動が認知症高齢者の主体性やコミュニケーションを引き出すとともに、興味・関心や役割意識を把握するためのアセスメント手法としても有効である可能性が示唆された。今後は複数事例での検証を重ね、認知症高齢者に対する個別ケアのさらなる充実につなげていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究（実践）発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認を行い、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、同意を得た。

《7. 参考文献》

- ・藤原 茂：園芸療法入門，夢の湖舎，山口，2003.
- ・小浦 誠吾：日本における園芸療法の現状と今後の可能性．園芸学研究，12（3），221-227，2013.

《8. 提案と発信》

園芸活動は、特別な設備や専門的な技術を必要とせず、認知症高齢者が自然や季節を感じながら主体的に参加できる実践である。また、興味・関心や役割意識を把握し、個別ケアにつなげるためのアセスメント手法としても有効である。今後も継続して実践を重ね、認知症高齢者の生活の質（QOL）の向上につながる支援として広く活用されることを期待したい。

本実践が、認知症高齢者の主体性を尊重した個別ケアを推進する実践例として、他施設においても参考となることを期待したい。